

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福社会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成29年11月 第201号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

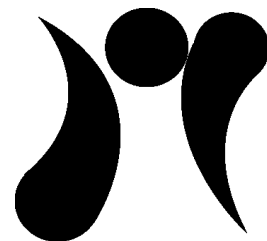
認知症カフェ&子供食堂 —予防を超えバトンタッチの助走の為に—

『超高齢』&『超少子』の社会を迎えて今、『認知症カフェ』と『子供食堂』が世の流行りです。

認知症になっても安心して暮らせる街を創る為に、『認知症サポーター養成講座』が全国各地で開かれ、認知症を正しく理解し、認知症の人に優しい街をつくろう、と呼びかけます。認知症は進行性の『脳の病気』で、今のところ根本的な治療法はないが、早期の発見・対応・治療で、進行が止まったり、遅れたり、或いは治る場合もあるので、『認知症専門医』・『認知症サポート医』・『認知症初期集中支援チーム』を地域に配置して、『予防と早期の発見・対応』に努める、と行政は説明します。徘徊する認知症の人を街中で見守る仕組みも、各地で始まりました。そして講座を受講した人の大半が、認知症を正しく理解し、優しく接する方法を学んだ上で、『認知症にだけは成りたくない』と言われます。『正しい理解とは、一体何なんだろうか?』と大きな疑問が残ります。

市場経済が地球全体に広がる中で経済格差が著しく拡大し、少数の富裕層と多数の貧困層に2極分解して、世界的に政情の不安定な国が増えて来ました。ヨーロッパの各国では、中東やアフリカから内乱やテロの戦火を逃れて流入する多くの移民・難民に苦慮しています。日本においては『深刻な少子化』の中で、貧困家庭における子供の保育や教育・食事が大きな課題となり、教育費無料化や給付型奨学金などが検討されています。そして全国各地で今、バランスの良い食事を子供達に提供する『子供食堂』が始まりました。

人は、親から子へ、老人から子供へ、と社会を引継ぎ、歴史を続けて来ました。人は『老いて逝く営み』を次世代に委ね、社会を構成する為に必要な『思想や人間性・社会性』を伝えて人生を締め括ります。『他者に委ねる死』は、人間のみが持つ『本能的習性』として、子供達に社会をバトンタッチする重要な意味と役割を持つ営みです。高齢者介護の世界で始まった『認知症カフェ』と、学童保育の場で始まった『子供食堂』とを繋ぐ『運営上の工夫』が今、非常に重要な意味を持つように思えます。(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

特養やグループホームで『重度の認知症の人』と接していると、その『社会生活能力』に驚かされます。認知症の初期から中期の頃には、万引きの疑いで警察や検察に呼び出される『困り人』だった人が、『重度に進行した今』は見事な社会性を発揮して、明るく朗らかに暮らされています。脳を活性化し進行を遅らせる薬を飲まずとも、自らの『感性と感覚と経験則』で見事に社会人として振る舞います。認知症の故に知性や理性が衰え認知機能が低下して、辻褃の合わない言動も増えますが、『世間の許容量』を超える行為は『稀』にしか起こしません。許容できない行為を繰り返して、精神科医の投薬や入院を必要とする人は、『百人に一人』が時々居るか居ないかの程度で、大半は『許容量の範囲』に収まります。成長途上で覚えた『知性・理性』は認知症の故に衰えても、生物として備える天性の『感性・感覚』と数十年の生活で身に付いた『経験則』が支えとなって『適度な社会性』を発揮し、持てる力のベストを尽くして懸命に生き、穏やかに人生を締め括られています。

多様に変化する『自然と社会』の中を、柔軟に生き延びてきた人間の『変化の極意・神髄』が、『認知症の故の言動の奥』に潜んでいるように思えます。『多様に柔軟に変化』して生きる『社会性』の原点が、『認知症に因る変化』の裏側に在ると確信します。『認知症の人に学ぶ』。認知症の人の『辻褃の合わない言動』の『裏側』に潜む「感性や感覚・経験則」に気づく『感性』を、我々は学びたい、身に付けたい、と願います。『認知症』は、目先の利害・損得・打算を超え、『知性・理性の支配』を超えて、『長く生きた身』に備わる『感性・感覚・経験則』を子供達に『バトンタッチ』する為の『助走』だと思えます。予防を超え、『適度にペースダウン』して、バトンを手渡し、人生を締め括るのです。

『認知症カフェ』の中に『子供の居場所』を創りたい、と願います。

『認知症の人』の手を借りて『子供食堂』を営みたい、と願います。

子供達にこそ、認知症の人が秘める『感性や感覚・経験則』に触れて欲しい、気付いて欲しい、感じて欲しい、と心より願っています。

せいりょう園 渋谷 哲



年の瀬コンサート 2017

ヴァイオリン：村津 瑠紀 (加古川市出身)

ピアノ：松盛 由佳 (姫路市出身)

日時：2017年12月27日(水) 14:00開演 (15:00終演予定)

会場：リバティかがわ2Fホール (加古川市野口町長砂95-2)

料金：会員 1,000円 非会員 2,000円

(村津瑠紀後援会に登録すると、会費 3,000円で入場でき
次回より会員料金で入場できます)

演目：エルガー『愛の挨拶』 マスネ『タイスの瞑想曲』

映画「ピノキオ」より『星に願いを』 ほか

問合せ：せいりょう園 TEL (079) 421-7156





海外研修 報告書【後編】

管理栄養士 田村 愛弓



ホール

8日間の海外研修ではさまざまな施設を視察し、私が想像していた介護と違うところも多々ありましたが、参考になるところもたくさん見せていただきました。働く職員と高齢者との関係性についても、良いところだなと思ったひとつです。オーストラリアでは、介護士と高齢者は「パートナー」という考えでお互いに接しているそうです。介護士はサービスを提供するというよりも、同じ家族としてできないところだけを補助する。できないところを補助するという点においては日本の介護と変わりありませんが、私は高齢者の方を「家族」と思えるところに良いと感じました。人生の先輩であり敬うべき方というのはオーストラリアの介護職の方も思っていますが、高齢者の方の中には自分の終の棲家で他人行儀な触れ合いはしんどいという思いがあり、その方には介護職も家族のように接しているのだそうです。介護職も高齢者の方を家族と思うことで、生活のサポートをする時により親身になって対応することができるとおっしゃっていました。日本は人生の大先輩である方々に馴れ馴れしく接するのはあまり良いこととは思われない傾向ですが、接するときの気持ち次第で声掛けやケアの仕方、気づきが変わってくるのであれば、一人ひとりに合わせて接していくのも個別ケアとして良いのではないかと思います。

その他にも、良いと思える点がいくつかありました。介護施設を5ヶ所見せていただきましたが、どの施設でもゆったりとした時間が流れていました。観察していると、職員自身の雰囲気も日本と違うと気づきました。聞くと、日本の介護職がひとりで行っている仕事が細分化されて別の職種として行われていました。それによって直接介護を行う職員の業務量が減り、心に余裕が生まれて施設内の雰囲気もどことなく明るい感じを受けました。また心に余裕が生まれたことにより、高齢者一人ひとりの機微に対して敏感になれる、問題行動の原因究明ができる、一人ひとりの要望に応えることができるといわれていました。こういった働きにより、ナーシングホーム内に驚くようなものが設置してありました。利用者の問題行動の抑制や要求への回答のため、敷地内には本物そっくりのバスストップ（バス停）が設置してあったり本物の車が置いてあったりしました。これは認知症の高齢者の方が、「バスに乗って家へ帰る」と言われてよく施設から出ようとし、その行動理由を職員で突き詰めた結果設置するに至ったとのことでした。バス停を設置後は、ご本人の思う「停留所でバスを待つ」という行為ができているために、その後生活する中でご本人に落ち着きが生まれ外へ出ようとすることは減ったそうです。また、車は「車を磨きに帰りたい」という要望に応えての設置だそうです。職員がじっくりとお話を伺うことで問題行動の原因になっていることは何か、何を排除・付与すれば心穏やかに過ごしていただけるのか、これも職員に心の余裕があるから気づきができ、対応策を考える時間ができるのかと思いました。ただし気づきができても、職員数がいなくては細かなことにも対応していくことは難しい場面もある。その点、オーストラリアは移民が多い国なので、介護業界でも多くの移民の方を受け入れて職員数を満たしているそうです。また、オーストラリアはもともと国民性から、厳しい仕事をする人を尊敬する傾向にあり、日本ほど介護の人員不足には陥っていないため細かな業務も行うことができるとのことでした。また尊敬されることにより、介護職のプロ意識も育てられ、

さらに良いケアができる。ただし、やはり厳しい仕事には変わらないので、介護職への尊敬がされているオーストラリアにおいても人員に余裕があるわけではないといわれていました。



実際に提供されている食事（きざみ食）

もう一点、食事の面での対応も工夫されていて良いなと思いました。オーストラリアでも高齢化が進んでいることから、昔に比べ食形態の対応が必要になっている場面が増えている。提供形態としては日本同様、常食・きざみ・みじん・ミキサー食を提供しており、その他病態（糖尿病・腎疾患など）にも対応しているとのことでした。その中で高齢者の方の要望にできるだけ応えるために、厨房には毎日献立以外のメニュー（サラダやデザート何種類か）を準備してあるそうです。できる範囲内で工夫して常に食の要望に応えようという姿勢は、同じ食事に関する仕事をしている身として純粋にすごいなと思いました。

すべての行程を終えて最も心に残ったのは、オーストラリアの人々が考える「老い」についての受け止め方と、業務中に起きる大小さまざまな問題への考え方でした。国が違えば文化や物事の捉え方、考え方が違うのは当たり前です。考え方の違いは想定していても、思った以上に違って本当に驚きました。オーストラリアの人々すべてが共通の認識ではないでしょうが、研修中にお会いした方に話を伺うと皆様「老い」については本当にとっても自然のことで抗うという思考自体あまりないように感じました。体力が落ちるのも、認知症になることも、なるものは仕方ない。どうにもならない先のことを気にして落ち込むより、残りの人生を楽しく過ごすためにどうすればいいかを考える方が有意義との考えでした。訪問した施設に限りますが、高齢者のご家族の方は高齢者本人が望んでいたことを優先するのが当たり前で、あくまで老いていく家族に寄り添うだけの形が多いそうです。介護職の方においては、利用者の問題行動や職員間の問題など先々のことを不安視するより、問題が起きてから対処すればいい。不安視して考えすぎて、それがどうなるというのか。と、はっきりおっしゃる職員の方もいて、言われてみればそうかもしれませんが簡単にできる考え方ではない気がして、国が違えばここまで考え方が違うのかと本当に驚きました。問題への対処の仕方や高齢者ケア・認知症ケアの考え方は、これらの考え方に基づいて今のオーストラリアの介護が行われているのだなと改めて思いました。考え方が違うために参考にできないところもありますが、高齢者一人ひとりにしっかりと向き合っご本人が何を思っているのか聞き取る・行動から観察する姿勢は国が違っても尊敬できる場所です。また物事の捉え方についても、オーストラリアの人々のように前向きに考えることは難しくても「考えすぎても良いことはない」という見本になりそうで、自分が思いつめた時にこの度の海外研修で感じたことを思い出すとまた別の考え方が思いつきそうな、そんな気持ちがしました。



食堂

初めての海外、初めての介護現場で、見るもの聞くものがすべて新鮮に感じられてとても有意義な研修となりました。この度栄養士という立場で海外研修に参加させていただいたこと、本当に感謝しております。この度のさまざまな経験を他の方々にも話し、少しでも役に立てればと思います。

専門は永源寺です

在宅介護支援センター相談員

岩田 みつ子(看護師)

高砂市在宅医療推進フォーラムにおいて花戸貴司先生の講演を聞く機会がありました。先生は滋賀県東近江市永源寺診療所の医師です。17年前から現職として地域医療に関わって来られた永源寺地域での「在宅医療」「地域包括ケア」「地域と共に」という内容での講演でした。対象人口5400人、高齢化率34%、在宅患者さん80名、年齢は4歳～103歳、もちろん看取りもされていて永源寺で亡くなる方の半数を在宅で往診での看取りをされています。実際に関わって来られた方のケースの紹介とスライドをもとに「治す医療」から「支える医療」へと変革している現状を自身の経験を通してのお話でした。

一人暮らしであっても、認知症であっても、障害を抱えておられても、皆さん笑顔で生活されていますと述べられた通りスライドの中の方々は心の底からの笑顔でした。そのために家族、医療関係者、施設、御近所さん、地域の委員さん、ケアマネ等々地域の方が繋がり「チーム永源寺」を作り地域を支えています。その中にお巡りさんも一員なのですが、一般的には警察は保護すると考えがちですが、それは地域からつまみ出すということになる。そうではなくてその方の情報を繋げるという役割を担い、生活の困難さを安心に変えることを一緒に考えましょうという方向で皆が同じ方向を向いて地域づくりをされています。

そして、年老いても自分らしく過ごし、普段から「どのような場所で、誰と生活するのか、どのような治療、療養を希望するか」を家族と話し合っておくことが大切であると。そのための工夫として先生は、診療所でお薬手帳をA5判の大判にしてお薬の情報はもちろん検査結果、診察の時にどういう話をしたのかを書いておく、元気な時に「ごはんが食べられなくなったらどうしますか」「寝たきりになったらどうしますか」「胃ろうは」「人工呼吸器は」といった対話の内容を書いておくことで救急搬送されて本人が判断出来ない状態になっても家族が伝えられる。対話がないと「出来る限りの事をやって下さい」になってしまい本人が本当に望んでいることにならない。よりよい最期を迎えるということは死を見据えた話をタブーにしないという事です。

先生は在宅医療は、高齢者が「生きる」という事を若い人たちに伝える絶好の機会だと述べられました。今の子供たちは身近な「人の死」ばかりか「老・病・死」を経験することが少なく、家のおじいちゃんが病院で亡くなり、お葬式の遺影を見せられても、おじいちゃんの頑張った姿を思い出すことは少なく、本人に触れる事もない状況の中で命の繋がりは感じられない。又、悩みながら、考える。それが、お別れの時間だと述べられた。突然の死は亡くなってからの別れの時間がやってくるので答えのない問いが続くことになる。しかし、迷い、考えて過ごすことを経ての別れは充実感、満足感があると。それが「死を見据えて生きる事」を伝えていくことに繋がると。

地域で安心して暮らすという事は従来の『分けて、集めて、縛る』から「混ぜて、散らして、繋ぐ」と、支援から共生への変革、そして本当に自立しているなあと思う人は頼らないのではなく多くの頼れる先を作っておくことだと結ばれました。

私が花戸先生のお名前を知ったのは2014年のテレビのドキュメンタリー番組でした。その番組の中で写真を撮影したのが2015年のせいりょう園創立30年記念特別企画での国森康弘氏の『みとりびと一写真と講演』の中のまさしく写真の中の先生でした。国森さん

が永願寺を取材され在宅のあたたかい看取りの現場に先生の姿がありました。実際に講演をお聞きする機会に出会い今の永願寺地域を作りあげる過程にもいろいろな体験、気負いがあったことなどを知りました。病気だけみても何も解決出来ないことがある。特に認知症の方の生活など地域に出て行って初めてわかることがあった等。テレビの映像の中で夫が寝たきりの妻を介護、様々なサポートにより在宅で自然な死に向かっていく中で夫婦もお互いが向き合い、充実した時間を過ごしておられる、その事をサポートする我々が邪魔しないようにすることが一番の仕事だと述べられている先生の言葉が私の中には今も強く印象に残っています。

そして東近江の図書館、公共施設、ありとあらゆる場所に国森さんのみとりびとの写真集が置いてあるという事です。日常の中で誰もが手軽に自然な死、あたたかい看取りに触れることができるのでしょうか。

せいりょう園にも写真集が置いてあります。地域の方々、家族の方、トライやるで来てくれる中学生にも今、一度見ていただきたい思いを再認識した花戸先生の講演でした。

最後に先生のご専門は何ですか・・・と聞かれたら小児科医？内科医？在宅医療？

冒頭の「専門は永願寺」ですと返答されています。

介護についてみんなで語ろう会

ユニット型特養介護職

高瀬 美咲（介護福祉士）

10月の語ろう会では、せいりょう園の地域密着型特養、ユニット型特養、グループホーム、ケアハウス、サービス付き高齢者向け住宅の見学を行いました。参加された方に実際に見てもらうことで雰囲気を感じ取って頂けたのではないかと思います。

私が勤めているユニット型特養の特徴は、全個室となっているのでプライバシーが守られ一人ひとりの生活リズムに合わせながらの個別ケアを行っています。家庭に近い環境でご家族も訪問しやすく、ユニット内には『アトリエ一番星』という多目的ホールがあります。アトリエでは、ピアノ教室や陶芸・造形教室、認知症カフェを行っています。ピアノや歌声が聞こえると、ホールで過ごされている方も、懐かしいのか自然とリズムに合わせて体を揺らしたり口ずさんだりしています。また、陶芸教室で作った作品で夏祭りの日には展示会を行いました。地域の方にも来て頂いて俳句の会を開催するなど行事やイベントがあるので入居の方は、きょうは何があるのかな？と毎日楽しみにされています。ご家族やボランティアの方、地域の皆様と交流する中で、昔の事を思い出したり新しい事に触れてみたり、心を元気にする大切な時間を一緒に共有できて嬉しく思います。

私も語ろう会に参加して、普段他部署に行く機会が少ないので実際に足を運ぶことで入居者の方々の生活の様子、建物の構造など知ることができました。まだまだ知識不足なのでこれをきっかけに他部署との関わりを増やしていけたらと思います。今回参加された方との意見交換や感想を現場の職員や地域の方にも発信していきたいと共に、せいりょう園を選んで頂けるよう日々のケアに努めていきたいです。

次回の語ろう会は11月24日に開催します。

皆様の参加をお待ちしています。





朝晩の冷え込みが嘘のような秋晴れのさわやかな日に、たくさんの方々のご参加を頂いてのご講話でした。お話しして頂くのは西神吉町鼎(かなえ)にあります南宗寺の月嶋教史ご住職です。ここへ来られる前に門徒さんの所に月参りしてこられたとお話しになっていました。そこでの話しから始まりました。

「お参りしたお宅のご実家ではまだ黒電話があるそうです。最近の子は黒電話のかけ方を知らないそうです。ダイヤルを回す事が分かりません。それ以外にもよく聞くのが、急須を知らない子が多い事です。ペットボトルのお茶を飲むので、急須で入れたお茶を飲むという習慣がなくなってきました。また、私は2年ぶりに健康診断に行きましたが、台の上に乗ったと思ったら計測器が頭上に降りてきて、計測終了。あっという間の事で背筋を伸ばす事も出来なかったので身長が1cmも縮んでいました。年齢のせいかもしれませんが。どんどん便利になっていきますね。世の中便利になったら失う事も多いですね。段々と『いのち』も見えにくくなってきました。」

そこから例をあげてお話し下さいました。「新聞に掲載された牧場経営者の方の話です。牧場見学で小学校の生徒さんが来ます。たくさんいる牛を指さして、『どの牛がコーヒー牛乳出す牛ですか?』、動かなくなったカブト虫には『電池が切れたのかな』と言うそうです。最近では食事の時には『いただきます』と言わない子が多くなりましたね。学校の給食で『いただきます』と言うと文句を言う保護者がおられるという話を聞いた事がありますか。『給食代を払っているのだからもらうのはあたりまえだ』という考えです。『いただきます』というのは『あなたのいのちをいただきます』という意味ですよ。」

『いのち』についてある小学校の話をしてくださいました。ある書物に出ていた話だそうです。古雑誌を売ったお金でヒヨコを二羽買いました。皆で大切に育てました。男子が鶏小屋を作り、日曜日にも夏休みも冬休みも誰も当番を忘れませんでした。卒業を前に、どうしようという事になりました。クラス会議を開いて話し合いました。「五年生に育ててもらう。」「五年生がお休みに餌を忘れてたら死ぬかもしれないので、皆で食べよう。」多数決を採りましたが「どちらでもいい」が過半数でした。その時ある保護者が新聞に投稿しました。「どうしたらいいでしょうか」。(次ページへつづく)



子育てひろば「にこにこ」in せいりょう園

10月23日にNPO法人子育てサポート☆きらりing主催の子育てひろばがリバティかがわで行われました。せいりょう園としては初めての試みで、果たして来てくれるのかとの心配もありましたが、予想を大幅に上回る40名の子供達とその親御さんが来られ、たくさんの子供達から元気をもらいました。中には、入居者の方がお孫さん親子と一緒においでになり、子供達と一緒に過ごされました。

[今後の予定 11/27(月) 12/24(日) 1/22(月)]



(前ページのつづき)

回答が掲載されました。「私は毎日鶏を殺すのが職業です。誰かが殺さなくては、誰も鶏肉を食べられません。鶏も殺される時は、悲しそうな目をしています。世の中にはこんな辛い仕事をしている人がいる事を忘れないためにも、食べて下さい」。もう一人の方が「世の中にはいろいろな職業の人がいます。どうか自分の知らないところで、自分のために働いている人がいる事を忘れない大人になって欲しい。専門の所に持って行って食べなさい」と。結果がどうなったのかは発表されていません。

ご住職は話されました。「そんな仕事は辛いからしたくないと辞めても、今の世の中誰かがしないとイケない。そういう社会の仕組みを作ったのは私達です。それがこの世の中なんです。多くの方が鶏肉を食べています。自分で殺していなくても、お肉をいただく事は仏様の教えでは『殺している』のと一緒です。『いただきます』と何気なしに言っていますが、見えるものの背後にどれだけたくさんの見えないもの、多くのいのち、たくさんの人々のお陰があるのか、その中で生かさせていただいている事に気づかせていただく事が大事です。

さらにお浄土には『共命鳥(ぐみょうちょう)』という鳥がいるそうです。身体が一つで頭が二つ、別々の事を考えて動こうとしても身体は一つなので仲良くしないといけません。ところが、一つの頭がもう一方より自分が優れていると考え、それを実現するために、共のいのちなのにもう一方を殺そうとしました。毒入りの物を食べさせたのです。食べさせてから気が付きました。身体は一つなので自分も息絶えてしまいました。何を物語っているのでしょうか。身体の一部が地球で、頭の一部が私達一人ひとりとする事が出来ます。一人ひとり身体は別々でも皆、根っこでは繋がっています。支え合っています。地球・自然環境という意味でも私達はいろんな恵みをいただいています。けれどもそれを当たり前だと思い、自然環境を痛めつけている。人類という枠でみても、人類・国籍・性別等様々な違いを認めて支え合っていかなければならないのに、逆の方向に向かっているような感じがします。無限の繋がりの中でいただいた「いのち」です。皆さんも、次の世代へと繋がる大切な「いのち」です。「いのち」は自分だけのものではありません。子や孫の世代に何かを残していく、残されたものは先立ついのちから受け取る大切なものがあるのではないのでしょうか。」と話されてご講話が終わりました。

例をあげて分かり易くお話し頂き、あっという間に時間が過ぎました。皆様口々に「ええ話やった。良かったなあ」と言いながら帰っていかれました。

本当にありがとうございました。

(介護支援専門員：岡村 照代)

【せいりょう園空き情報 平成29年11月8日現在】

○サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」

33㎡：3室 ・ 35㎡：1室 ・ 39㎡：1室

○サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」

19.07㎡：8室 ・ 24.67㎡：3室 ・ 25.80㎡：2室

○ケアハウス：1室(バス・トイレ・キッチン付24㎡)



[問合せ先] せいりょう園 TEL(079)421-7156/(079)424-3433